ISSN 1340-8070

BRIDGE

●同朋大学“いのちの教育”センターだより

INDEX

お釈迦さまも不安だった？ ……1
―生老病死に向きあって―
デンマーク人のくらしと人生からみる
高負担・高福祉の共同社会 ……2
子どもの“いのち”を守ること ……3
―子ども虐待への支援から―
新型コロナウイルスと情報教育 ……4
―国語学の場合―

同朋大学“いのちの教育”センター
〒453-8540 名古屋市中村区稲葉地町7-1
TEL 052-411-1373
Eメール宛先　inochi@doho.ac.jp

今年度は、大学院改組により人間学研究科仏教人間学専攻がスタートしました。そこで連続講座（全５回）の講師は、松田正久学長（第３回）と大学院担当教員の中からお願いしました。新型コロナウイルス感染拡大により、第４・５回（千賀先生・織田先生）は学内開催とせざるを得ませんでしたので、講座内容は今号でぜひ御味読ください。第１・２回（汲田先生・園田先生）の内容も収録しています。「いのちの教育」をともに学びたいと思います。

2021.3.31 NO.53

お釈迦さまも不安だった？
― 生老病死に向きあって ―

織田 顕祐

お釈迦さまは、約2,500年前の北インドの王族の王子として生まれた。王子として生まれ、何不自由なく生活していたお釈迦さまが、一体なぜ王宮の生活を捨てて出家したのか。それは仏伝に説かれた「四門出遊」の物語を通して考察することができる。

あるとき、気晴らしに王宮を出ようとしたお釈迦さまは、城の東門である存在に出会った。お釈迦さまは「あれは一体どのような方なのですか？」と聞いた。従者が「あの方は老人」ですと答えると、さらに「老人とはどういうことですか？」と聞いた。老の意味を知ると、「老とはこの人だけのことですか、それともすべての人がこうなるのですか？」と聞いた。「すべての人は例外なくこのようになるのです」と聞いて突然ショックを受け、遊びに行く気持ちは萎えてしまい、城に戻って憂いに沈んだのである。同様にして南門・西門で病人・死人と出会い、最後の北門で出家して道を求める沙門に出会い、一筋の光明を得たという物語である。

「人は死ぬ」ということは誰も皆知っている。知ってはいるが「すべての人」の中に自分は入っていない。お釈迦さまのように、自分は死ぬものであると自覚すると、人は得体の知れない恐怖や不安に襲われる。いのちあるものは例外なく生老病死するのであり、その事実を淡々と生きている。その中で人間だけがそれを受け入れることができない。それゆえ私たちが日常的に感じる得体の知れない恐怖・不安はもっとも人間的なものと言える。だからその恐怖・不安から目を背けたり何かに転嫁しようとすれば、もっとも人間的なものを失って生きることになる。

明治の仏教者清沢満之は、「人心の至奥より出づる至盛の要求の為に宗教あるなり」と言った。人の心のもっとも深いところから湧き出る強い要求とは、上に述べたような恐怖や不安のことではないだろうか。そうだとすると、正体不明の不安や恐怖は私たちの心の奥に隠れた宗教心の表面的な顔と言えるのである。

（本学文学部特別任用教授・
大学院〈仏教文化分野〉担当教員）

デンマーク人のくらしと人生からみる高負担・高福祉の共同社会

汲田　千賀子

消費税25％、所得税と住民税、医療付加税を合わせて約58％、これがデンマークで年間所得39万クローナ（約660万円）の人が支払っている税金である。この負担によって一人ひとりに保障されるのが、医療・教育・福祉である。小学校から大学までの学費、病院での治療、入院、手術、福祉サービスの利用、福祉用具の購入、高齢者住宅などでケアを受ける、いわゆる老後の資金などを蓄えておく必要はない。

これだけの税金を支払う国民は、政治への関心も非常に高く、選挙への投票率は常に80％に上る。「国を守るのは自国民しかいない」というデンマーク国民の共生意識が高いのは、かつての国土争奪戦の歴史によるものだという。若い人の政治への関心も強く、政党ジュニアクラブに所属し現役議員と一緒に勉強会に参加している子どもたちもいる。大臣の平均年齢は41.8歳で、国会議員の所得は、この国の平均所得と同様である。

国民の“くらし”への関心は、「閉店法」の法律からも垣間見える。この法律は、商業施設の就労者が家族と一緒に休日を過ごせるようにするために、スーパーや商店などを日曜・祝日は店を閉じなければならないというものである。国民にとって大事なことは、平等にその権利を守っていくという姿勢である。

デンマークは、「フレクシキュリティ」が機能する国と言われている。この言葉はフレクシビリティ（労働市場の柔軟性）とセキュリティ（生活保障）を掛け合わせた造語である。労働者の３分の１が毎年転職すると言われているデンマークでは、生涯で計６回の転職をするという。それを可能とするのも、失業保険が手厚く生活水準が低下せず、さらに転職に必要とされる職業訓練（資格修得等）が無料で受けられるためである。“くらし”と“仕事”は密接な関係にあるが、高福祉・高負担の共同社会ではそれらをバランスよく保っているといえる。

（本学社会福祉学部准教授・
大学院〈人間福祉分野〉担当教員）

子どもの“いのち”を守ること
―子ども虐待への支援から―

千賀　則史

近年、悲惨な虐待死亡事例の報道が続き、児童相談所などの対応のあり方が問われている。しかし、子ども虐待とは、虐待を行った保護者から子どもを保護するだけでは根本的な解決にはならない。地域でのつながりが希薄化し、社会的に孤立し、生活困難に陥ることが多くの虐待ケースに共通する構造であるならば、虐待という危機に直面している家族を問題視し、社会から排除するのではなく、コミュニティの一員として包み込み、支え合うことが支援の本質だと思われる。

子ども虐待への支援では、家庭基盤が脆弱で機能不全に陥っている家庭をまるごと社会的に包摂するという視点が必要となってくる。この考え方の土台には、親子関係の修復が難しくても、適切な保護的対象者のいる社会との絆を強めることが大切であるという発想がある。社会福祉の領域では、「社会的包摂」というキーワードがさかんに使われているが、問題を抱える子どもや家族に対して、支援者がサポートすることが社会的包摂だとは思わない。むしろ支援者―被支援者の関係性を超えて、人と人とが生きづらさを相互包摂しあうことのできる関係性を創り出すことが社会的包摂だと考えられる。適切な社会的包摂能力のある社会でこそ、過剰な自立心や依存心を持つことなく、お互い必要なときに人と社会に助けを求めることができる人を育むことができると思われる。

子ども虐待とは、社会全体で解決すべき問題であり、それぞれが子どもの“いのち”を守るためにできることは何か考え、行動することが求められる。専門家－非専門家という枠に縛られずに、人と人とが苦悩を共有し、少しでもよりよき新たな人生の創造・発見を目指して、相互支援的包摂関係を構築する「新たな社会的絆の創成」（共生的社会の共創）こそが重要ではないだろうか。

（本学社会福祉学部准教授・
大学院〈臨床心理分野〉担当教員）

新型コロナウイルスと情報教育
―国語学の場合―

園田 博文

新型コロナウイルス感染拡大により実施した「遠隔授業」の中でも、自宅で『日本語歴史コーパス』（国立国語研究所）等を使って言葉を調べることが可能だという内容をお話しいたしました。国立国会図書館デジタルコレクションも有用です。

さらに、言葉の移り変わりということから、ハ行子音の変遷に及び、「はひふへほ」の発音は「パピプペポ」だった可能性も紹介いたしました。平仮名・片仮名が漢字をもとにして生まれるのが平安時代初期ですので、奈良時代の『万葉集』等はすべて漢字で書かれています。母という語は万葉集では「波ゝ」と表記されています。この発音は「パパ」であったかも知れないということを五つの手がかりとともに示しました。後日、学生から「それではパパのことは何と言っていたの？」「中国語の爸爸〈パパ〉との関連は？」という質問が出て、関心を持ってもらえたことに満足しています。

室町時代になると、ポルトガル人が日本にやって来ます。ポルトガル式ローマ字で当時の話し言葉が記された『天草版伊曽保物語』を見ると、母は「faua」（ファワ）と記されています。『天草版伊曽保物語』も『日本語歴史コーパス』で検索することができ、しかも、原本（世界に一冊しかない大英図書館所蔵本）のカラー画像（無償）で実物を確認することが可能になっています。これにより、従来の影印本では文字がかすれて判読できなかったものが、より正確に読めるようになっています。

講座当日は、コロナ対策もあり、双方向でのやりとりはできませんでしたが、終了後、ご来場の方からの感想もいただけたので、話し甲斐があったと感じました。

年も改まり2021年1月にこの抄録の原稿を書きました。コロナ第3波の只中です。皆様の御身体を案じ、早く今までの生活に戻れるよう心から願っています。

（本学文学部人文学科教授・
大学院〈仏教文化分野〉担当教員）

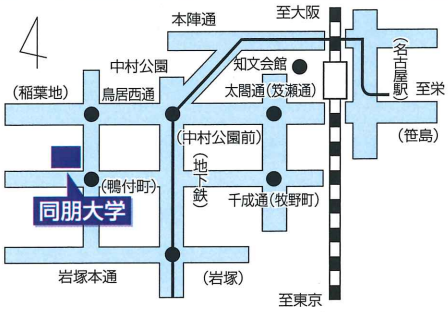
所　員

センター主幹：安藤　　弥（文学部 教授）
所　　員：森村 森鳳(張偉)（文学部 教授）
所　　員：北島　信子（社会福祉学部 教授）
所　　員：岩瀬真寿美（社会福祉学部 准教授）
所　　員：市野　智行（文学部 専任講師）

お問い合わせ先

同朋大学“いのちの教育”センター
〒453-8540 名古屋市中村区稲葉地町7-1
☎ 052-411-1373

同朋大学 周辺地図



交通
市バス／栄又は笹島より㉔系統稲西車庫行、鴨付町下車
地下鉄／中村公園より⑬系統稲西車庫行、鴨付町下車